



© Tim Graham/CORBIS
© Quadrillion/CORBIS
© Tim Graham/CORBIS

今なお輝き続けるプリンス Legend of Princess Diana ダイアナ妃 という伝説

Text: KAORI NAKANO



Anwar Hussain/WireImage.com

Fashion



Alpha/amanaimages

この夏、没後10年を迎えたダイアナ妃。その鮮烈な存在感は、今もなお薄れることはありません。この連載では、イギリスの文化に通じたエッセイストの中野香織さんがダイアナ妃の真の魅力、現在の視点から分析してゆきます。今月のテーマは「ファッション」について。彼女の装いにはその時々思いが込められていたがゆえに、印象的だったのです。

英国女王は公の場に出るときに着る服を「プロップ (props)」と呼ぶ。お芝居の小道具という意味である。王室のメンバーに求められるのは、演劇的な役割。だから装いはファッションステイトメントであってはならない。エリザベス女王の写真を並べて眺めると、そんなゆるぎなきロイヤルスタイルが見てとれる。

また、王室のメンバーではないが、ジャクリース・ケネディは、ファーストレディとしてリーダーとして世界中の女性から模倣された。「ロイヤルな」印象を失わないのに、ファッションナブル。ケネディ時代の彼女の写真からは、そんな「ジャッキースタイル」が感じ取れる。

しかるに、ダイアナ妃はどうか。典型的なロイヤルスタイルの実践者ではない。かといって筋の通った「ダイアナスタイル」があるかといえば、そうでもない。ときには失敗もしながら、あらゆるテイストに果敢に挑み続けている。

しかも、その装いは常に何かを伝える。そのときのダイアナをおもしろいほど語る。だから、結婚前のスローンレンジャー時代から、亡くなるまでのダイアナ妃の写真を年代順に並べていくと、波乱に富んだ「女の一生」のドラマがでてくる。まるでカラーになったサイレント映画のように。ダイアナ妃は、ファッションを通してコミュニケーションしてきた女性だった。「物語」や「思い」を伝えるダイアナ妃のファッションは、それゆえ、見る人の目ばかりでなく、心にまで焼きつく。

ダイアナ妃が着たおびただしい数の服は、人々とのコミュニケーションのために注いだ努力を映し出すものが多い。とりわけ海外を訪問するときには、訪問国への敬意をファッションで表現する。1986年の日本訪問時に着た「日の丸ドレス」もそのひとつ。フ



rw Q
©w



歴任最年寄のシフとしてケンジント

英国王室

の総 理長を務め、そ

キッチンに遊びにいらし

喜ばせた彼

11 月からはアルマ

表参道(英国王室)

の任 中

レシビを、トハウ表参道

10、国 カレン

26

を作

英国皇太子

チ



wé p wU

© Tim Graham/Corbis



SIPA/amanaimages

は

ムロードのブティックで見つけた既製服である。きめ細かさに感心するのは、たとえば1991年にブラジルを訪問したときに、ワールドカップの決勝で敗れたブラジル・サッカーチームの緑と黄色を避け、さらに敵国アルゼンチンチームの青と白まで使わなかったこと。現地のエチケットをあらかじめリサーチしていたデザイナーのキャサリン・ウォーカーが「その色が暴動を起こすかもしれない」と配慮した結果でもあった。

慈善活動に携わるときの装いも、相手とのコミュニケーションを考慮して選んでいる。病院へ行くときには明るい色を。なかでも、ターコイズと黄色と赤の花柄がちりばめられたダークブルーのデイヴィッド・サースンのドレスは、「ケアリング・ドレス(慈しみのドレス)」と呼んで繰り返し着た。服は常に半袖だったが、それは相手に直接、触れるため。だからロイヤルプロトコルである手袋もつけなかった。目が見えない人を訪れるときには感触がもしろい服地を選び、子どもたちを訪問するときには、抱いたとき子どもがおもちゃにできるようなぶら下がるネックレスをつけた。

そんな意識的なコミュニケーションばかりではない。ダイアナ妃の意図の有無にかかわらず、ファッションがダイアナの「物語」を伝えてしまう場合も少なくない。たとえば、自信なさげ、ちょっとヤボな「シャイダイ」(Shy Day) から、どんなトップモードをもグラマラスに着こなす世界のファッションアイコンへの変貌。そんなダイアナ妃の変貌の歴史の始まりと転機も、ふたつの黒いドレスが物語る。

1981年3月、チャールズ皇太子の婚約者として初めて人前に姿を現す夜、ダイアナが選んだのは、デイヴィッド&エリザベス・

エマニュエル夫妻がデザインした黒のストラップレスのロングドレス。これが既製服で、直す時間がなく、ダイアナが車から出るときにずり落ちそうになった。「息づかいが聞こえそう」なドレスはメデリアに大うけ、結果、「ウインザーショー」の主役はダイアナにいつてしまい、しかも「王室のメンバーは喪中と葬式にのみ黒を着る」というプロトコルを破って王室の人々の矚目を買う。ダイアナと王室との確執の始まり始まりと活弁士なら語りそうなドレスである。

それから13年後の1994年6月、チャールズ皇太子がテレビで自らの不倫を告白する模様が放映される日。ダイアナ妃はサーペンタインギャラリーの夕食会に出席する予定だった。当初、ヴァレンティノのブルーのドレスを着るはずだったが、執事は、黒いシルククレープのオフショルダーのカクテルドレスをすすめる。クリステイナ・スタンポリオンの、これも既製服である。中央に卵型サファイアをあしらった真珠のチョーカー(皇太后陛下からの婚約プレゼントをリファームしたお気に入り)をつけたダイアナ妃は、この世になんの心配ごともないわという余裕の微笑をたたえてさっそうと車から降りた。翌朝、全新聞の一面をダイアナ妃が飾る。デイリーミラー紙にいたっては「これでもか(『The Daily Mirror』)という大見出しをつけ、不倫告白の皇太子については「統治者不適任」と小さく出しただけ。ダイアナ妃をウインザー戦争(サーペンタインの戦い)において「勝利」に導き、ひとりの女性の自立をまぶしく印象づけたこのドレスは、「リベンジドレス」「ファックユードレス」とひそかに命名され、ダイアナ妃の転機を鮮やかに伝える。

ダイアナ妃とよい協力関係を続けてきたキャサリン・ウォーカーが受けた最後の注文は、執事からだった。棺に入るときの服である。ウォーカーはダイアナ妃が今にも起きて笑顔で歩きだしそうな黒いドレスを作った。